

空き家活用による まちなか医療の展開とまちなか景観の保全

研究代表者：後藤 春彦
(早稲田大学大学院 創造理工学研究科 教授)

実施者・協力者： 早稲田大学大学院創造理工学研究科/医学を基礎とするまちづくり研究所、奈良県立医科大学、一般社団法人MBTコンソーシアム、橿原市、今井町住民審議会、今井町自治会、橿原市今井町並保存整備事務所、NPO今井町並み再生ネットワーク、チームPREドクターズ

実施地域： 奈良県橿原市今井町

背景

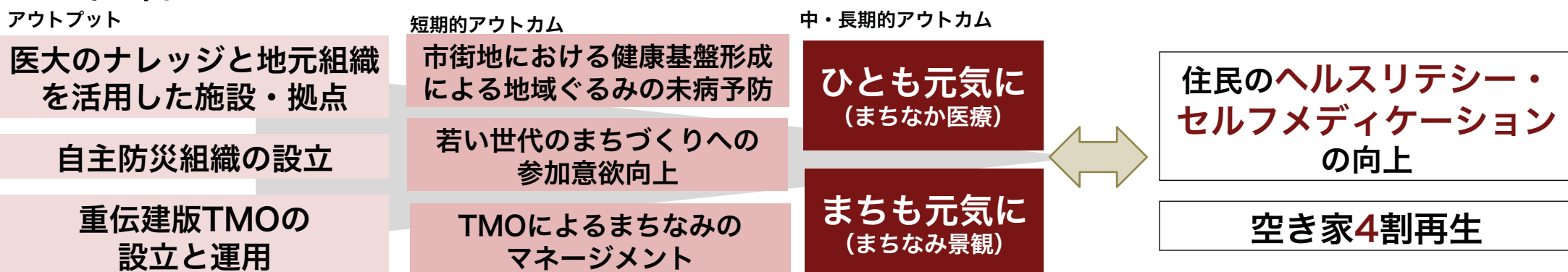
重伝建地区の建築行為制約により更新が進まず新規活力の導入が途絶え、まちなみとコミュニティの弱体化が深刻の中、本提案では「**まちなみ景観とまちなか医療の相互補完による持続可能な重伝建保存**」を今井町のビジョンとして掲げ、健康関連機能をインフィルする「まちなか医療」の確立によって「まちなみ景観」の向上が達成される。ウォーカブルな「まちなみ景観」による健康効果の活用によって、高度医療に頼ることなく未病を治す「まちなか医療」の実現が達成される。



重要伝統的建造物群保存地区今井町

プロジェクトが目指すもの

<目標>



<明らかにしたいこと>

- RQ1** ソーシャルキャピタルの成熟度をいかに可視化しその程度を計量化することができるか？「まちづくり知」をどのように蓄積し、「活動の継続と改善」「暗黙的ノウハウの一般化」に活かすことができるか？
- RQ2** 多世代（特に若い世代）のまちづくり活動への参画深化プロセスと動機付けにはどのようなものがあるか？参画を深化・継続させる「まきこみプロセス」とはどのようなものか？

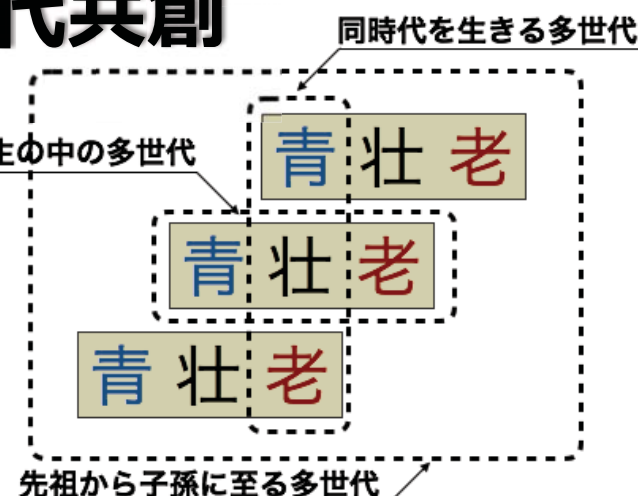
<成果の活用イメージ>

住民自治のオーラルヒストリーを次世代に伝承しながら、新規居住者の住まいの手本、重伝建版TMOの行動指針となる。今井町の住民組織（今井町住民審議会、今井町自治会、橿原市今井町並保存整備事務所、NPO今井町並み再生ネットワーク、チームPREドクターズ等）及び奈良医大、重伝建版TMO、MBTコンソーシアムは社会実装の担い手になる。そして、本研究にて一般化・体系化された知見は、取り組みアイデアの一覧メニューを備えたガイドブックとして編纂し、他の重伝建や歴史的町並み地区における同様の取り組みに対して参照可能なツールに仕上げる。

プロジェクトにおける持続可能性、多世代共創

【「みっつの多世代」による共創によって構築される社会関係資本】

1. 同時代を生きる多世代による共創である。
「まちづくりスコアシート（MSS）」という基礎技術の支援を活用
2. 先祖から子孫に至る多世代による共創である。
まちづくりの遺伝子を次の世代へと受け渡していくツールとする
「まちづくりオーラルヒストリー」を活用
3. ひとりの人生の中に存在する多世代による共創である。
ワークショップ手法である「まちづくり人生ゲーム」を活用し、ひとりの中に存在する多世代を参加者に意識させることで、長期的視点に立った議論が可能となる。



【具体的な実施項目】

まちなみ景観とまちなか医療の相互補完による持続可能な重伝建保存

まちも元気に
(まちなみ景観)

ひとも元気に
(まちなか医療)

自主防災組織設立

今井町防災会と連携して、学生主体の自主の防災組織を設立する。

「今井町アネックス」プロジェクト ソフト事業推進

現地事務所を拠点に健康維持増進、疾病予防医療、リハビリ療養支援、医療ツーリズムなどのソフトの事業展開を推進する。

重要伝統的建造物群

保存地区版TMO設立

重伝建保存地区内の建物を管理・把握するTMO (Town Management Organization) を設立し、観光地化の傾向がある対象地を「生きた重伝建」として維持すべく、住環境の質向上を基本とした適切な更新を目指す。

【成果・今後の方針】

現在、関連団体へのヒアリングを実施中。今後、地元商工会や建築・不動産関連団体、金融機関等へのヒアリングおよび勉強会・準備会の定期開催を通じて設立を推進する。

「今井町アネックス」プロジェクト ハード事業推進

医大の機能の一部を町内にインフィルし、町並み景観、医療福祉、地域生活の各視点から効果測定を行う。

ヘルスリテラシー・ セルフメディケーション向上の評価

健康見守りシステムを活用が与える住民への影響を、定期的な研究員の訪問インタビュー等により評価する。

建物データベース構築

現地事務所を拠点に、GISを用いて、空き家のみならず町内全建物に関して、建物利用状況等に関するデータベースを構築し、TMOによるまちなみ管理の基礎情報を整理する。

【成果・今後の方針】

高齢者のみ世帯等による潜在的な空き家の調査ニーズを把握したため、町内全建物を対象にDBを構築する。オーラル・ヒストリー調査成果やICT技術との連携も試みる。

高齢者の健康見守りシステム開発

センサーをとりつけた実験住宅やまち中のビーコン等と奈良医大をICT技術により連携させる。また緊急時に駆けつけるボランティアのネットワークを構築する。

現地事務所を拠点とした学生・若年層の巻き込み

(h29現地拠点拡充予定)

オーラルヒストリー調査

学生を中心とした聞き取り調査により、町内の暮らしに関する思い出を収集しコミュニティ史として編纂するとともに、その共有により、住民のまちづくりへの意識を醸成する。

【成果・今後の方針】

住民109人を対象とした調査を基に冊子を作成した。また、H29年2月には成果報告会が開催され総勢69名が参加した。冊子は今後配布されるとともに、各作業項目に活用される。



【実施する上での課題と対応】

■ 研究開発上の課題と対応

実験協力者及び実験器具の確保

高齢者の健康見守りシステムの要素技術が確立しており、その成果を組み合わせることで技術開発が可能である。ただし、それを住民に活用させ、その健康習慣向上への寄与を検証する点については、十分な数の実験協力者を確保すること、実験器具数を確保することが課題となる。

対応

実験協力者は、橿原市と地域住民組織の協力を得て募集し対応する。また、実験器具数の確保については、MBTコンソーシアム会員企業の支援を受けることで対応する。

■ 社会実装上の課題と対応

次世代の担い手へのバトンタッチ

当プロジェクトの遂行にあたっては、地元住民組織、自治体等の全面的支援を得られるため、社会実装については比較的スムーズに達成可能と見込まれる。ただし、医大生を含めた次世代の担い手をどの程度巻き込めるかについては予見が難しい。

対応

奈良医大から学内広報など含む支援を受けるとともに、学生団体「チームPREドクターズ」ほかとの緊密な連携によって対応する。